

報告「チュルゴにおける野蛮と文明」  
セッション「野蛮、啓蒙と経済学の形成」

報告者：野原慎司

『国富論』冒頭において、スミスが平等だが貧しい未開社会との対比で、不平等だが豊かな文明社会の姿を描いたことはつとに有名である。不平等は、所有権の保護と表裏一体である。そして、所有権の保護は、勤労を促進させることであろう。不平等の是認（および所有権の保護）から分業の必要性、そして経済学理論へという理論的筋道をスミスはたどっている。

スミスとは文脈も経済理論の内実も多く異なるとはいえ、分業理論と不平等の関係性という点で、チュルゴの1750年代の理論形成には類似性が存在している。ケネーの影響を受ける以前にすでにチュルゴは萌芽的な分業理論を構築していたが、それは不平等の是認を含むものである。その不平等の是認は所有権の保護の必要性という主張が含まれるものである。チュルゴにおいても、所有権の保護と不平等の是認は、自らの文明社会観と経済学構築の基礎となることであろう。

ミークが指摘したように、チュルゴは、スミスと並んで、狩猟、牧畜、農業、商業の各社会というふうに、生活様式に応じて段階的に発展する社会という考え方（四段階論）に到達した史上初の人物とされている。のちにチュルゴもスミスも経済学の創設の主軸をなすことになるのであるが、経済学の形成以前の段階において、各自別々に類似した歴史・社会観に到達していた<sup>1</sup>。

では、両者がそれぞれ、お互いを知ることもなく別々に、しかも類似した歩みをたどったのはなぜであろうか。そこには、スコットランドやフランスというそれぞれの固有の文脈を超えて、何か共通の知的文脈が存在していたと推測した方が良いのかもしれない。その場合、何が両者に共通する知的文脈なのだろうか。

具体的に、その点をチュルゴに即して検討してみよう。チュルゴがおそらくはじめて分業の必要性に言及するのは、人間の不平等の必要性について述べた段においてである。チュルゴは、境遇の不平等について、「それが必要なのは、

---

<sup>1</sup> Ronald Meek, *Social Science and the Ignoble Savage*, Cambridge U. P., 1976.

人間が平等に生まれついていないからである」と述べる<sup>2</sup>。

その上で、境遇の不平等は、所有権の保護を通じて、勤労を促進することを主張する。「もし怠惰な人や無知な人が、勤労な人や器用な人からみぐるみをはがすならば、あらゆる仕事は打ち砕かれ、困窮が一般化する。才気や幸運に欠ける人が、その人たちを雇用でき、前もって給与を与えることができ、将来の生産物のうちの一部を彼らに保証できる人に、自らの腕を貸すことは、より正当であるしより有用なことである。かくして、彼らの生活資料は確保されるが、彼らの依存もまた確保される。生産的な仕事を発明し、協力者に仕事をなすための食料と必需品を提供し、自由契約のみによりことをなしている人が、最良の部分を持し、この前借 *avances* の価格のためにより少ない労力でより多い余暇を有することは不正ではない」<sup>3</sup>。

こうして、「不平等は、最も有徳で最も道徳的な諸民族のあいだでも生じてきたし、増加してきた」。この不平等は豊かさと表裏一体である。けだし、「全く小麦を生産しない土地の住人を生きさせるのは何からか。ある国の産物を他の国へ移行させるものは何なのか。最も零細な農民でもたびたび遠く隔たった風土から集まった一群の商品の享受している。最悪の備えの人を取り上げても、千の手、おそらく十万の手が彼のために働いている。職業の分配 *distribution des professions* は必然的に境遇の不平等へと導く。それなくして、どんな有用な技芸が完成するというのか」。こうして、チュルゴは、職業の分化の必要性としての分業を、財産と境遇の不平等の不可避性、および所有権の保護の必要性から説き起こす。この際、未開人を好むことは、嘲笑すべき叫びに過ぎないとチュルゴは批判する<sup>4</sup>。

なお、このチュルゴの分業論が出てくるのは、啓蒙の知識人を集めたサロンの女主人として、かつ小説家として知られたグラフィニー夫人 (*M<sup>me</sup> de Graffigny, 1695-1758*) の『ペルー娘の手紙 *Lettres d'une Péruvienne*』(1747年)への、夫人自身への批判の手紙においてである。ペルーからパリに連れてこられたインカの娘ジリアが、離れ離れになったいいなずけへ送る一連の手紙とい

---

<sup>2</sup> Anne-Robert-Jacques Turgot, “Lettre à Madame de Graffigny sur les Lettres d'une Péruvienne”, in *Oeuvres de Turgot et documents le concernant avec biographie et notes par Gustave Schelle*, Tome Premier, (Librairie Félix Alcan, Paris, 1913), p. 242.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 242.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 243.

う書簡文学の形式をとるこの作品において、ヨーロッパ文明の習俗の批判が登場する。インカでは王が人々の生存の糧を与えるのを義務付けられているが、ヨーロッパでは主権者が臣民の労働から自らの生存の糧を引き出しており、「金がなければ、自然がすべての人間に与えたこの地上というものの一部分を得ることができないし、財産と呼ばれるものを持たなければ、金を有することはできない」のであり、彼らの徳の実態は富でしかない。また、「洗練 *politesse* と彼らが呼ぶものは、徳から外れているという彼らの欠点を」隠しているにすぎない<sup>5</sup>。他人の行動の「検閲 *censure*」こそがフランス人の習俗の特徴であり、フランス人は著作では習俗一般の批判を、会話ではそこにいない個別の個人の批判を行う。フランス人は本性から悪いのではなく、ただインカのような「感情の素直さと習俗の純朴さ」を失っており、徳も悪徳も人工的となっている。いわば社会におけるささいなつまらないおもちゃで、フランス人は他国から評価されているだけである<sup>6</sup>。

チュルゴが分業論を展開し、境遇の平等という理想を批判したのは、このように、未開（野蛮）社会を理想視する立場への批判という文脈においてであった。なお、グラフィニー夫人のこの著作が発表されたの 1747 年であることから伺えるように、またこの著作が評判となったことから伺えるように、ルソーの文明社会批判は、チュルゴひいては啓蒙主義の知識人が意識する唯一のものであったわけではない。知的な影響度においてチュルゴやスミスにとってルソーにはるかに劣るかもしれないにせよ、ルソー以前における、多数の著述家による長期間の、未開（野蛮）社会を理想的に描く旅行記やそれに触発された文学の蓄積もまた、チュルゴら啓蒙の知識人が意識し反発する社会観として存在してきたということである。

チュルゴやスミスには、自然法学者においてはさしたる賛同者が見出せない財産の平等への批判がまま見受けられるが、それは、望ましい社会観・世界観をめぐって、ある対立が存在していったことを示すのである。

実際、スミスもチュルゴも、文明社会を描くのに、未開・野蛮から文明へという発展段階的な社会観を有しており、より厳密な四段階論よりも、文明社会

---

<sup>5</sup> François de Graffigny, *Lettres d'une Péruvienne*, (Voltaire Foundation, 2002), pp. 159-160.

<sup>6</sup> *Ibid.*, pp. 197-198.

と未開（野蛮）社会の対比の方をスミスもチュルゴも好んだのであるが、平等な社会、あるいは私有財産の保護が確立しない社会は貧困がつきものであり好ましくないという主張をたびたび行った。では、両者は、どうして、文明社会と対立するものとして、未開（平等）社会を選んだのであろうか。そして、初期近代のほぼすべての自然法学者は、私的所有権を保護することの重要性を認めており、もはや私的所有権の保護は自然法学上の論争点とは言い得ないにもかかわらず（ルソーとて所有権を捨てて未開社会に帰ることを、社会選択の問題として推奨した訳ではない）、執拗といってもいいほどにスミスとチュルゴが所有権の擁護にこだわったのはなぜであろうか。むろん、それが両者の経済学の基礎となっていることがその主要な理由であろう。だが、所有権保護の重要性を言うだけであれば、あえて私的所有権の保護の確立していない平等で未開な社会をあれほど文明社会と対比させ、場合によってはこきおろす対象として選ばなくても良いはずである。

推測するに、むしろ、文明社会は、その対概念として未開（野蛮）社会を必要としたといっても良いのかもしれない。文明社会の特徴を浮き彫りにする際に、未開（野蛮）社会はなくてはならないものである。

ひいては、啓蒙主義者の世界観は、なかんずく彼らの文明社会観は、北アメリカは「未開」社会、トルコは「野蛮」社会、中国は「専制」と言ったように、世界の見取り図を描くなかで、その位置づけや特色を決定し彫琢することにより培われたと言っても良いかもしれない。未開（野蛮）社会と文明社会との対比は、チュルゴやスミスのみならず、ルソーをはじめ啓蒙の知識人の世界観の土台ともなっている。

むろん、啓蒙の知識人の世界観の背景は、多数の複合的な要因から成り立っているし、また人によりまちまちである。しかし、一つには、初期近代の旅行記などによる北アメリカや中国やトルコなど異国の情報が多数入ってきたことが背景としてある。また、旅行記に触発される形で、「高貴な未開人」や「善良な未開人」、あるいはその社会をユートピア的に捉える形の文学も多数登場した。また、旅行記のなかにも虚構的なユートピア的要素がないまぜになっているものも多い。

これらの旅行記や文学のなかには、北アメリカのインディアンを、「高貴な未開人」の社会として、すなわち文明に毒されていない、財産が共有であったり

する平等で、かつ人々が有徳で純朴さを保っている社会として描いたものも多い。そもそもヨーロッパにおいて、古典古代や聖書のなかに失われた「黄金時代」を見出す伝統が存在した。タキトゥスの『ゲルマニア』は、ゲルマン人のなかに有徳な野蛮人を発見した。聖書のエデンの園の記述もまた、失われた「黄金時代」の記述ともみなしうる。だが、いずれにせよその「黄金時代」は失われたものに過ぎない。対して、この失われた「黄金時代」の代替物として、北アメリカの「未開」社会は機能したが、相違があるとすれば、後者は「現実に存在する」ように思われていたということである。失われたはずの「黄金時代」が現実にそこにあるとなれば、西欧人の少なくとも一部が熱狂したのも無理からぬことである。

なお、「高貴な未開人」の初期近代における淵源はどこにあるのか。十六世紀にはモンテーニュは、野蛮人のなかに、習俗の洗練が失わせた自然的な善良さを見出そうとした<sup>7</sup>。また、ドライデン (John Dryden, 1631-1700)は、『グラナダの征服 The Conquest of Granada』(1670)において、「高貴な未開人 Noble Savage」という表現を最初に用いた（ただし、ドライデンのこの表現は、完全な未開人というよりもより社会状態の進んだアステカのような「野蛮人」を意図していたものだと推測されているが、両者はあまり区別されていない）<sup>8</sup>。

北アメリカに関しては、十七世紀にはイングランドで出版された一般の書物には、イングランド人とインディアンの交渉の様子はまだあまり載っておらず、インディアン社会の詳細に触れずただその残忍さを非難するという（自らの植民者としての立場を擁護するための）出版が多かったのに対して、十七世紀中葉に毎年刊行されていた『イエズス会報』が質量ともに圧倒していた（宗教関係の記述を除いては、イングランドでもそれは信頼されていたという）。十八世紀には、ラフィットーやシャルルヴォワと並んで、ラオンタン男爵が人気を博した。特に、ラオンタン男爵 (baron de Lahontan, 1666-1716)の北アメリカ三部作は、フランス語、英語、ドイツ語、オランダ語で出版され、復刊を繰り返した。それは、インディアンとともに暮らした冒険譚であるが、体制宗教批判をインディアンに語らせたものとして、懐疑主義者や合理主義者が好んでインディアン

---

<sup>7</sup> Hoxie Neale Fairchild, *The Noble Savage: a study in Romantic Naturalism*, (Russell & Russell, 1955), Chap. I.

<sup>8</sup> *Ibid.*, pp. 29-30.

を取り上げる契機となった<sup>9</sup>。また、ラオンタン男爵は、インディアンに、「おまえのもの、おれのもの」という区別が、したがってお金こそが、みだらな欲望、嘘、裏切り、悪意などこの世に存在する諸悪の根源であるという文明批判を展開させている<sup>10</sup>。対して、文明社会の礼儀作法という気取りや偽善のない森での狩猟生活、すなわち、狩の獲物のビーヴァーを部族全体で分け合い、獲物が十分取れないものには補ってやるような、気心の知れた仲間と食べたり歌ったり踊ったりする気楽で自由な暮らしを称揚する<sup>11</sup>。

この背景には、十七世紀最後の四半世紀には、アジアを含めた世界各国の情報も関心が急増しはじめていたことが挙げられる<sup>12</sup>。旅行記をはじめ世界各国の情報は、頻繁に翻訳されていたし、イングランドやフランスという国を超えて情報はヨーロッパ的広がりをもっていた。人類の単一起源を説く聖書の世界観、あるいは聖書や古典古代の書物という権威となる古典には記載されていない各国や世界の情報が、これほどの短期間に集中的に入ってくるということは、世界認識の図式そのものを変えるインパクトを持ちうるものであった。十七世紀の終わりごろから十八世紀前半にかけての旅行記等により世界の情報こそが、十八世紀中葉に啓蒙主義の知識人が、みずからの世界観構築の一つの背景としたものである（言うまでもなく、他にも様々な背景が考えられる）。

本報告では、紙幅の都合上で、チュルゴを目途としつつ、チュルゴ以前における、旅行記やそれに影響された文学における未開（野蛮）社会観、あるいはその文明批判を取り上げたい。それらは、チュルゴに、世界観の見取り図を与えるとともに、それとの対峙を通じて自らの文明観の形成にもつながるものであっただろう。

---

<sup>9</sup> P. J. Marshall, & G. Williams, *The Great Map of Mankind: British Perceptions of the World in the Age of Enlightenment*, (Dent, 1982), Chap. VII. (大久保桂子訳『野蛮の博物誌：18世紀イギリスが見た世界』（平凡社、1989年）、第七章）

<sup>10</sup> Lahontan, *Dialogues de Monsieur le baron de Lahontan et d'un sauvage...*, (Amsterdam, 1704), pp. 52-54. (小池・松崎訳『著者と、良識があり旅行体験もある未開人との、興味ある対話』（野沢・植田監修『啓蒙のユートピア I』（法政大学出版局、1996年）所収）、578-579頁）。

<sup>11</sup> *Ibid.*, pp. 65-70. (同上、587-590頁)。

<sup>12</sup> Marshall & Williams, *op. cit.*, pp. 7-8. (前掲書、18-19頁)。